

## WHC 第13回OB・OG夏合宿記録 (2019年8月4日～6日)

8月4日午前10時東京発の東北新幹線「やまびこ133号」、ホームや車内で、参加者が互いに再会の挨拶を交わして今年の夏合宿が幕を開けました。参加者は次の20人で、間もなく傘寿の方から還暦ほやほやの方まで、年齢幅がかなり広がりました。このうち小坂さん、田所さんの2人は初参加です。また、田上さんはマイカーで参加され、いろいろと便宜をはかっていただきました。

1期…大河内、佐藤一雄、田中 2期…中島 3期…小川戸  
4期…大竹、小坂、田上、徳淵、西海、花田、五十嵐  
6期…川崎(河口)、杉原(綿貫)、柁木(小幡)、佐藤徹 7期…加藤  
8期…齋藤(=リーダー)、佐藤憲一 19期…田所

なお、夏合宿の参加者20人は、第8回(2014年)の吾妻連峰合宿に並ぶ最大人数になります。

齋藤リーダーの計画書には「今年の夏合宿は、磐梯高原(裏磐梯)で爽やかな高原の夏を楽しみます。ここは裏(北側)から見るとダイナミックな山容を見せる「宝の山」磐梯山と、その火山活動で形成された、数えきれないほどの大小の湖沼群の景観が特徴の高原なので、明るく開けたあるいは神秘的な風景の湖沼巡りと、汗を流して登った山頂の大展望で自然を満喫します。」とあります。

今年は梅雨空が長く続いて7月は記録的な日照不足になりましたが、WHC合宿に合わせてくれたように、関東甲信では7月29日、裏磐梯を含む東北南部は同30日に梅雨が明けました。

\* \* \* \* \*

初日(4日)は、3年ほど前のNHK「ブラタモリ」で放映されてから人気が急上昇したという、銅沼(あかぬま)を訪ねました。



郡山で乗り換えた磐越西線の車窓からは会津盆地の稲田が広がり、沿線のススキが秋の訪れを告げ、少し霞んではいましたが、宝の山・会津磐梯山が均整のとれた山容を見せていました。東京・郡山間とほぼ同じ1時間20分ほどの乗車時間に各自昼食を済ませて会津若松駅で下車しました。いきなり「暑っッ！」それもそのはずで、この日の会津若松は夏の暑さで知られる福島県内でも最高の37℃でした(さらに5日は37.2℃、6日は37.7℃)。

駅前からレンタカー2台と田上車に分乗して裏磐梯スキー場の駐車場(標高930m)まで行って歩き始めると、先ほど表磐梯(猪苗代側)から見た穏やかな山容とは打って変わって、櫛ヶ峰から磐梯山に続く吊り尾根状の火口壁の正にダイナミックな火山風景が迫ってきました。振り向けば桧原湖が徐々に見えてきました。40分ほどで森を抜けると、火口壁に囲まれた赤味を帯びた銅沼(1110m)に着きました。荒々しい噴火壁と赤茶けた岩、いまだ昇る噴煙が1888年の大爆発を実感させてくれました。沼の水は強酸性で、鉄やアルミニウム、マンガン等



鉄やアルミニウム、マンガン等

が溶け込んでおり、湖底の泥が水酸化鉄を含んで赤く見えるため、沼全体が赤く見えるそうです。その一方で対岸のアカマツの緑と沼畔に咲くリウツギの花の穏やかな白さが印象的でした。この地で大竹画伯



が描いた風景を掲げさせていただきます。

少し戻ってヤナギランとオンタデの群生地から、大きな桧原湖や合宿の宿のある曾原湖が緑の中にぽっかり穴を開ける様子を眺めました。下りは来た道を坦々と戻り、車に乗ることわずかで今年の宿「レイクサイド イン バイクドポテト」(貸切り)に着きました。ここは、裏磐梯にある約80軒のペンションの中からリーダーが選んだもので、曾原湖を目の前にした瀟洒な建物と広々とした館内、オーナーご夫婦の明るい応対、創作フレンチ料理の提供と、毎年のことながらリーダーの宿選定眼の確かさに感心します。



お風呂でさっと汗を流してから夕食開始。小川戸OB会長の挨拶と乾杯の発声でまず喉を潤し、オーナーシェフの創作フレンチのフルコースに舌鼓を打ちました。この席でリーダーから来年、再来年の夏合宿の基本方針が示されました。その後、星博士の解説により夜空を見上げてから、例年のように持ち寄ったアルコール

とつまみによる懇親会、翌日の山登りを控えていたので大宴会には至りませんでした。

\* \* \* \*



2日目(5日)は山登りの日です。6時前から池畔の散歩に出た人もいましたが、6時25分のテレビ体操同好会で本格的な活動開始。7時からの朝食は4種類の手作りパンにヨーグルト、サラダ、ハム、ウィンナーなどのおかずやジュース、ミルク、コーヒーなどの飲み物も豊富でした。

山登りは2組に分かれ、それぞれ磐梯山ゴールドラインの八方台登山口の駐車場(1194m)まで行き、のんびりコース7人は猫魔ヶ岳(1404m)に、頑張りコース11人は磐梯山(1819m)に登りました。また自在チームの2人は独自のコース設定をして、全員8時に出発しました。



磐梯山へは、登山口からブナ林の中の緩やかな登りで始まり、しばらく行くと中ノ湯に出ました。今は硫黄臭のある泥状の湯が沸いて廃墟となった建物があるだけですが、私・五十嵐は「富士巡礼」をテーマに旅した1968年の6月に猪苗代から会津富士こと磐梯山を越えて、当時健在だったトタン屋根の宿に泊まり、板葺きの湯小屋の中の風呂に入ったことがあります。同宿したオジさんに誘われてネマガリダケのタケノコを一抱えも採って我が実家の食卓を飾ったことも51年前の懐かしい思い出です。この先で前日の銅沼から来る道を合わせて、本格的な山道になりました。緑の葉に覆われて日差しが直接当たるところは少ないのですが、風が全く吹かず、暑いこと、暑いこと。前を行く人の汗が地面や木







の根に落ちて染みこんでいる、その上に自分の汗がほとりと落ちる、腰回りから膝上までぐっしょりと濡れてズボンが変色してくる、というも凄さ。それでも、清楚なエゾアジサイや色も形も華やかなタマガワホトギスに励まされて行くと、稜線からお花畑コースに入って一気に展望が開けました。絶壁の下に銅沼からスキー場、さらには桧原湖が、目前には楯ヶ峰の岩峰が迫り、辺り一面は様々な色の花の楽園。無数の赤トンボが乱舞し、ミヤマアキノキリンソウ

やウメバチソウも咲き始めていて、暑い中にも確実に秋の訪れを感じることができました。弘法清水小屋に着いて、パイプの先から流れ出る冷たい水に喉を潤すと生き返った心地がしました。ここで待望の昼食。おにぎり、唐揚げ、卵焼き、それに有志の方が作ってくれた味噌汁、コーヒーも美味しかったです。



1時間近い昼食休憩後、上級者9人は往復1時間20分ほどで急登を登りつめて頂上に立ち、南の猪苗代湖、北の桧原湖、重畳とした緑の山なみの大展望を満喫しました。中級者約1人と花博士は40分ほどかけてお花畑を散策し、間近の岩峰や中景の吾妻連峰、安達太良山をバックにして爛漫と咲き競う花々・・・オニシモツケ、ヤマハハコ、シモツケソウ、タカネナデシコ、ミヤマシヤジン、トリアシショウマ、ハナニガナ、シロバナハナニガナ、オンタデ、メイゲツソウ、ヤマホタルブクロ、クルマユリ、カラマツソウ、アオヤギソウ、イタドリ、エゾシオガマ、ウバユリ、ネジバナ、オトギリソウ、赤い実をつけたアカモノ、シラタマノキ、タケシマランなど・・・を堪能しました。往復8時間余りを頑張って登山口まで戻ってから、裏磐梯レイクリゾートの日帰り湯に直行し、広々とした洗い場と桧原湖を見下ろす大きな露天風呂で汗を流して宿に戻りました。



この間、猫魔ヶ岳チームは、猫魔ヶ岳やまびこ探勝路を往復3時間、やはり大汗をかきながらのんびりと(かな?)歩いてきました。



また、自在チームはレンタカーを駆使して西吾妻山中腹の Gondola、磐梯山噴火記念館、ダリの作品を中心に展示する諸橋近代美術館を巡る等多彩な時間を過ごしたようです。

フレンチフルコースの夕食後の大宴会は前夜以上に盛り上がりました。普段あまり口にしない度数の高いアルコール類が特に好評でした。

\* \* \* \*



3日目(6日)はかなり  
趣きを変えた半日とな  
りました。

朝食後、所用で一  
足先に帰る小川戸さ  
んを見送ってから桧原  
湖畔へ行き、モーター

ボート2艘に分乗して船頭さんの解説付きで、風と波しぶきを受けながら30分ほどの湖上遊覧を楽しみました。思ったより大きな湖で大小様々な島を巡り、波の彼方の磐梯山の姿も素敵でした。



その後樹林の中にぽっかりと  
開ける五色沼自然探勝路の、3  
分の1ほど(柳沼、母沼、青沼、  
るり沼、弁天沼)を歩きました。  
特に青沼、るり沼はなんとも言  
えない神秘的な色合いで周囲  
の緑や磐梯山とほどよく調和し

ていました。1時間ほどの歩きで焼け付いたような喉をソフトクリームや氷水で癒やし、宿に戻って汗を拭  
ってから打ち上げ。生ビールや美味しい昼食に最後の談笑のひと  
ときを過ごしました。

\*                     \*                     \*



リーダー計画書の「爽やかな高原の夏」はなかなか実感できません  
でしたが、3日間1滴の雨に遭うこともなく、数々用意された「雨の  
日プラン」の出番のないまま過ごした素晴らしい合宿でした。次の機  
会もよろしく願います。ありがとうございました。

裏磐梯(う・ら・ばん・だい)を折り込み詠める。

「<sup>うつく</sup>美し湖沼に <sup>らんまん</sup>爛漫の花 <sup>ばんざん</sup>万山緑に 大展望」

(記録係 五十嵐昭)